

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 野元 裕樹 印

学位申請者 宮内拓也

論文名 ロシア語における名詞句の統語構造と意味解釈の研究  
顕在的な冠詞がない言語における名詞句の統語構造の問題によせて

## 【審査結果】

宮内拓也氏から提出された博士学位請求論文「ロシア語における名詞句の統語構造と意味解釈の研究 顕在的な冠詞がない言語における名詞句の統語構造の問題によせて」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は同氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であると全員一致で判断した。

最終試験は2022年7月28日13:30～15:50、オンラインによる公開で実施された。まず最初に宮内氏により提出論文の概要説明があり、その後各審査委員から宮内氏に対して質問や助言・講評などのコメントがなされ、最後に主査から講評の総括が行われた。

なお、審査委員会は野元裕樹（本学准教授）、匹田剛（本学教授）、箕浦信勝（本学准教授）、中村彰（本学准教授）に加え学外より辻子美保子先生（神奈川大学教授）をお迎えして5名により構成された。

## 【論文の概要】

本論文は、ロシア語のいわゆる名詞句の統語構造に関する研究である。伝統的にロシア語の名詞句はNを主要部とするもの、すなわちNPとして分析されてきたが、生成文法の理論的探究の中で例えばFukui(1986)やAbney(1987)などによりDP仮説が提唱されて以来、いわゆる名詞句がNではなく限定詞Dの投射であると再分析される傾向が顕著になった。この仮説自体が言語理論にもたらした貢献は大きいものの、ロシア語のように間違いなくDと考えられる要素を顕在的に持たない言語の分析においてDP仮説を採用すべきかどうかについては現在でも議論が分かれている。本論文は、すべての言語において名詞句はDPであるとする「普遍的DP仮説」と言語によってDPの場合とNPの場合があり得るとする「パラメーター化DP仮説」の間の議論にロシア語の視点から取り組むものであ

り、いくつかの観点から少なくともロシア語の名詞句は DP ではなく NP であることを論じ、結果として「パラメーター化 DP 仮説」を支持する結果を提示している。

本論文の構成は以下の通りである：

1. はじめに
2. 名詞句の統語構造
3. 束縛現象と名詞句の統語構造
4. 出来事名詞句と名詞句の統語構造
5. 名詞句の意味解釈と統語構造
6. おわりに

引用文献一覧

付録

索引

まず第 1 章「はじめに」では、研究に到る背景と本論文の目的を明らかにした上で(1.1)、本論文の構成を示し(1.2)、さらにグロスや言語名の略記や表記上のキリル文字のラテン文字への転写方法、例文の出典の記法など形式的な面での留意事項がまとめられている(1.3)。

続いて第 2 章「名詞句の統語構造」では、まず 2.1 節で「名詞句」、「X'理論」、「付加詞」という本論文全体を通じて前提となる概念や理論についてざっと紹介した上で、2.2 節で限定詞 D という範疇と DP 仮説によって想定される DP の構造および DP 仮説がもたらす一般理論に対する貢献・意義を概観している。さらに 2.3 節では顕在的な冠詞のない言語、とりわけスラブ語における DP 仮説を巡る議論を「普遍的 DP 仮説」と「パラメーター化 DP 仮説」という対立軸で概観している。その中で先行研究における論点・争点などをまとめ、両者の議論にはどちらが妥当であるかの決着はついてないことを示している。

第 3 章からは本論文の中核をなす、宮内氏による独自の議論が展開されることとなる。まず第 3 章「束縛現象と名詞句の統語構造」ではロシア語におけるいわゆる束縛現象を観察し、英語とロシア語で束縛に関わる振る舞いに違いがあることを指摘している。その上で、当該の違いが両言語における名詞句の構造の違いに帰するものであると結論付けた。すなわち、英語では名詞句が DP であるのに対して、ロシア語では DP が投射されていないという構造上の違いである。なお、その論証のために用いた c 統御の定義は以下の Kayne(1994)によるものを採用している。

(1) c 統御

X c-commands Y iff X and Y are categories, X excludes Y and every category that dominates X dominates Y.

「X と Y がともに範疇で、X が Y を排斥し、X を支配する全ての範疇が Y を支配する場合、かつ、その場合に限り、X が Y を c 統御する。」(Kayne 1994: 16)

この c 統御の定義に則ると、所有者が所有形容詞で生起する(2a)は所有者が目的語の人称代名詞を束縛して非文法的になるのに対し、所有者が生格で現れる(2b)では束縛が起きず文法的になるという文法性の差を正しく説明するには、DP 投射の存在を想定するわけにはいかないことを指摘している。

(2) a. \*Kolin<sub>i</sub>                    poslednij    fil'm            sil'no    ego<sub>i</sub>            razocharoval.  
          Kolya's-NOM.PL last                    film-NOM    really    him-ACC    disappointed

b. Poslednij    fil'm    Koli<sub>i</sub>            sil'no    ego<sub>i</sub>    razocharoval.  
          last                    film    Kolya-GEN    really    him    disappointed

「コーリヤ<sub>i</sub>の最新の映画は彼<sub>i</sub>をととてもがっかりさせた。」

第4章ではいわゆる出来事名詞の振る舞いを検討することでDP投射の有無の問題へのアプローチを試みている。まず、4.1節でロシア語の出来事名詞の文法的な振る舞いについて概説し、ロシア語の出来事名詞を動作主のみを生格名詞として取ることができるタイプA、動作主も被動作主も生格名詞として取り得るタイプAP、被動作主のみを生格名詞として取り得るタイプPの3つに分類している。続く4.2節ではタイプAの出来事名詞句はGPであり、タイプAPとタイプPについてはGPの上にさらにVoicePがあると考えることで、Chomsky (2000)におけるフェイズ不可侵条件とGallego (2010)のPhase-Slidingによって出来事名詞の項の分布を正しく説明できると論じている。

(3)フェイズ不可侵条件

In phase  $\alpha$  with head H, the domain of H is not accessible to operations outside  $\alpha$ , only H and its edge are accessible to such operations.

「主要部Hを含むフェイズ $\alpha$ において、Hのドメインは $\alpha$ の外からの操作に対してアクセス不可能であり、Hとその周縁部のみがそのような操作に対してアクセス可能である。」(Chomsky 2000: 108)

また、4.3節では意味論の観点からも上記の分析は妥当なものであり、さらに機能範疇 $n$ には統語範疇決定要素としてのみ機能する $n_{cat}$ と指定部にPossessorを要求する $n_{poss}$ の2種類が存在すると主張する。4.4節で一旦ここまでの議論をまとめた後、4.5節では造格動作主について議論を展開し、造格動作主は造格支配のゼロ前置詞を含む前置詞句であると結論づけている。さらに4.6節では上で提案された構造をもとにし、生格名詞句の前置

の可否を根拠にすることでサクソン属格の前置が可能な英語では DP の投射があるとすべきである一方、生格の前置が不可能なロシア語では DP の投射がないと結論づけるべきであると主張している。

第 5 章では、従来 DP を想定することで説明されてきた問題、すなわち名詞句内の語順について検討し、DP を想定しなくてもこの問題が意味論的に説明ができることを明らかにする。具体的にはまず 5.1 節において指示代名詞、所有形容詞・所有代名詞、量化詞の共起関係に関して以下の通り記述する。

- (4) a. 量化詞は所有代名詞・所有形容詞、形容詞に先行する
- b. 指示代名詞は所有代名詞・所有形容詞、形容詞に先行する
- c. 所有代名詞・所有形容詞と形容詞は相互に置換可能
- d. 量化詞と指示代名詞は共起しない

その上で、指示代名詞の意味タイプを  $\langle\langle e, t \rangle, e\rangle$ 、所有代名詞と所有形容詞のタイプを  $\langle e, t \rangle$ 、量化詞のタイプを  $\langle\langle\langle e, t \rangle, \langle e, t \rangle\rangle, t\rangle$  と考えれば統語的に DP の存在を想定しなくてもこれらの語順関係を正しく予測できると結論づけている。さらに 5.2 節では所有形容詞が数詞に先行する句の最大解釈について、所有者が DP 領域にあることが理由であると提案する Kagan and Pereltsvaig (2012) の説を、(5b) のように所有者が生格で現れる場合にも最大解釈が可能であることを示すことで、否定している。

- (5) a. Diminy            pjat'    knjig  
       Dima's-NOM.PL    five        book-GEN.PL  
       「ジーマの 5 冊の本」 (Kagan and Pereltsvaig 2012: 173)
- b. pjat'    knjig            Dimy  
       five        book-GEN.PL    Dima-GEN  
       「ジーマの 5 冊の本」

さらに、ロシア語は定性を顕在的に示す要素がないので定の演算子が構造上どこに現れるか判断できないという問題に対しても、論理的に想定できる全ての位置での句の意味計算を行うと正確な解釈が導出できる位置は名詞句の最上位の位置だけであるとし、NP 構造の基でも定性を示す DEF の位置は意味的に決まっており、定性を導出するために DP を想定する必要はないことを示した。

#### 【審査の概要と評価】

本論文は宮内氏のこれまでの生成文法理論によるロシア語の研究の中でとりわけロシア語の名詞句に構造に関わる研究に、新しい要素を加えながらまとめたものである。これまでも様々な研究者が活発に議論してきたロシア語のような顕在的冠詞がない言語における

DP 仮説の扱いに関する議論に宮内氏独自の視点から一石を投じるものとなっている。

口述審査において審査委員から本文に対して以下のような点が高く評価できる点として指摘があった：

1. ロシア語に関する新たに掘り起こされた記述的事実の指摘が多数なされている。この点、ロシア語学に対する貢献は大きい。
2. 興味深い記述がなされているだけでなく、精緻な説明理論の構築を試みている野心的な研究となっている。
3. ロシア語に関する生成文法の理論的研究として我が国で先駆的な研究で、一般理論に対する貢献も大きい研究であると言える。

一方で、いくつかの概念に関する質問があった上で、以下のような考慮すべき問題点や今後の研究への提言などが出された：

1. 第 3 章において束縛現象により名詞句の構造を論じているが、(非再帰) 代名詞の例(原理 B)のみ扱われ、再帰代名詞の例(原理 A)に言及がない。この点は記述的にも理論的にも不十分である。
2. 第 4 章において範疇 G を設定することによって、諸現象の説明を試みているが、この G というのはもっぱら生格付与を目的とするもので、疑問点が多い。検証が必要である。
3. 第 4 章においていわゆる名詞句に対して NP, VoiceP, GP という最低でも 3 つの範疇を想定しているが、これらの違いと類似性、他の範疇との関係をどう説明するのか。
4. 用いている理論装置の詳細 (Spell-Out のタイミングなど) が論文全体で一貫していない。一貫性を実現しようとする、提案された分析の一部が破綻する可能性がある。より大きな視点からの再検証が必要だと思われる。

今後の課題を中心に出されたこれらの指摘はいずれも本論文の価値を高く評価した上でのものであり、多くは今後の研究の発展を期待する建設的な提言・要望であり、決して本論文の評価に大きく影響するようなものではなかった。

また、質疑において宮内氏の応答は的確かつ誠実なものであり、多くの問題点は本人が既に認識しているものであった。この手の形式主義的な文法研究において、問題点が今後に残されるということは必然的と言っても差し支えないし、むしろ問題点を理解していることの方が重要であると考えられ、本人の研究を発展させる意志とビジョンが強く感じられた。

以上本審査委員会は、論文の内容及び最終試験での質疑応答に基づき総合的に検討した結果、宮内拓也氏の学位請求論文「ロシア語における名詞句の統語構造と意味解釈の研究 顕在的な冠詞がない言語における名詞句の統語構造の問題によせて」が博士(学術)の学位を授与するにふさわしいと全員一致で判断した。